

LOVE CORE #01

Author: flypaper

Illustrator: jilnel

LIBERTYWORKS 2011
Copyright © 2011 LIBERTY PRODUCTIONS



試し読み版

ADULTS ONLY

18歳未満の購入・閲覧を禁じます

LOVE CORE #01

act 1 : Childhood Memory	-----	03
act 2 : Wander in the Borderline	-----	**
act 3 : Lost & Falling	-----	**
act 4 : LOVE-CORE Arousing the Desire	-----	**
Publication Data	-----	**

※試し読み版では、act1のみ収録されております※

author:flypaper
illustration:jilnel

LIBERTYWORKS 2011

1 : Childhood Memory

その夜。俺はいつものホテルで、彼女との逢瀬を楽しんでいた。

俺たちはずいぶん身体の相性がいらしく、彼女は毎度毎度、肌を重ねるたびに一度ならず絶頂を迎える。今夜も最後の方は喘ぎ声を通り越して悲鳴に近かった。事後に俺が身体を離しても、彼女は起き上がる気配がない。荒い息を継ぎながらベッドに痙攣する四肢を投げ出し、秘部から流れ落ちる白濁もそのまま。玉のような汗がいくつも浮かび、うっすらと脂肪の乗った柔らかな肌の上を流れ落ちていく。目尻には涙。

けれどその顔は恍惚として、満足そうな笑みすら浮かべている。

「ほんと、女はいいなあ、何度でもイケてさ」

仰向けになつた彼女の乳房を掌で撫で回しつつ、俺は若干の嫉妬混じりに言う。

「何だっけ、一度のエクスタシーが男の数十倍とか百倍とかなんだよな？ しかもそれが延々と持続するんだって。お前を見てる限り、それ、ホントなんだろうな」

彼女はくすぐつたように、俺の手をやりわり払い除けて。

「結構、辛いよ……これ……。疲れるし……。ずつと、尾を引いて……。足、かくんつて……。仕事中に、なつたり……。デートの、翌日、は……。いつも、大変なんだから……」

彼女が気怠そうにベッド脇の小物置きへ手を伸ばし、ティッシュを数枚手に取る。汚れた股間を拭い終えると、手近のシーツを手繰り寄せて身体に巻き付け始めた。どうやら今夜はシャワーも浴びず、このまま眠る気らしい。

「それ自体うらやましいね。次の日まで愛し合つた余韻が残ってるなんて経験したことない。分けてくれよ、その気持ちよさ」

「無茶言わないで……。これは、女の特権……。なの。生理に……。出産……。しんどい思い、たくさんするから……。神様が……。男の何倍も、気持ちよくなる、身体、くれて……」

「あれ？ 作る気、あつたのか？ 子供」

悪戯っぽく言ってみると、彼女は力の入らない手でべちんと俺の身体を叩いてきた。

「わかつてるよ、ごめん。冗談、冗談」

仕事のこと、過去のしがらみ、社会的な立場、将来設計。いろいろ事情が重なつて、俺たちは互いの関係性に一本の線を引いている。身体だけの関係と言うほどドライではないが、二人で生きていく将来を夢に描くほど強い絆がある訳でもない。

だからこそ、互いに、純粹に、享樂としてのセックスを満喫しているんだろう。

「でもさ、こうやって毎度毎度、気持ちよさそうに寝っ転がってるお前を見ると、つくづく不公平だなんてどうしても思うんだよ。男なんて、ウツ、つてなつたらもう終わりだもんね。一度でいいからそんな風にエンドレスで感じてみたいね」

「むーりーでーすー……。今度、生まれ変わる……。時まで、我慢……。しなさい」

俺はその言葉を鼻で笑つて、ベッド脇にある冷蔵庫を開ける。ホテルが用意したミネラルウォーターを一本手に取り、蓋を取つて一気に煽る。今も情事の熱が残る身体に冷たい水を流し込む。

ふと、彼女が俺の顔をじっと見つめていることに気付く。

「何だよ」

「今、何だか……不思議な顔、してた。思い詰めた……みたいな」

「ん？ ああ、いや……その、小さかった頃のことをさ、ちよつと思ひ出してたんだ」

「どんな……？」

肌を重ねた後独特の、何とも言えない気易い雰囲気。

どんな秘密の話でもうっかり吐露してしまいそうな空気に流されるまま、俺は口を動かす。今まで誰にも話したことがなかった出来事。一時は軽いトラウマになっていた事件のことを話し始める。

「信じられないと思うけど……。俺、一歩間違ったら、女になつてたかもしれないんだ」

○

あれはもう、何年前のことだろうか。

俺は——いや、ボクは、また性について何も知らなかった。友達との会話の中心は、日曜の朝にやつてるヒーロー番組やアニメの感想。かろうじて体育の時間は男女別々に着替えをさせられるようになっていたけれど、ボクはその意味をまるで理解していなくて。

その頃、ボクには、仲のいい親戚のお姉ちゃんがいた。

身内の誕生日、法事、クリスマス、お正月。何かある度に必ず顔を合わせて、一日中一緒に居て遊んでもらっていた。お姉ちゃんにとってのボクは、あくまで歳の離れた可愛い弟分だったんだらうけど、ボクにとってのお姉ちゃんは、おそらく初恋の相手だった。その頃は当然、自分の恋心なんて自覚していなかったけれど。

そんなお姉ちゃんが都会の女子校へ進学することになった。誰でも一度くらいは名前を聞いたことがある全寮制の名門で、入学試験は難関もいいところ。親戚一同、よくそんな才女がうちの一族から出て来たもんだと大喜びしていたのだけれども、ボクだけは違った。大好きなお姉ちゃんにもう会えなくなる、そんなのは嫌だと泣いてダダをこねて。

周囲の大人たちは、おそらくボクの気持ちを汲んでくれていたのだろう。頭ごなしに叱らずにやんわり諭そうとしたのだけれど、ボクはお構いなし。いっぱい勉強して偉くなればお姉ちゃんがいる学校に行けるんだよね、試験にさえ合格すればいいんだよね——と、全身全霊を振り絞るような本気で食い下がった。

でも、大好きなお姉ちゃんは。

「無理だよ、どんなに頑張っても。キミは女の子じゃないんだから」

ボクの肩を抱いて、強い口調で叱るように、きっぱりと言った。

人生で最初の絶望だった。

今までお風呂も一緒に入っていたし、外でサッカーする時も、近所の幼馴染と一緒に人形遊びをする時も、ボクとお姉ちゃんは一緒だった。二人の間に壁なんて感じたことがなかったんだ。なのに、大好きなお姉ちゃん自身が、男に生まれた時点で君には資格がない、と最大級の拒絶を突きつけてきたんだから。

自分の股間にぶらさがっている小さなモノ——ボクにはあってお姉ちゃんにはないモノ。それ以前はその存在をどこか誇らしげにすら感じていたけれど、この日を境に憎むべき対象になった。これさえなければ、ボクはお姉ちゃんと一緒にいられるのに。

思いあまつたボクは、台所のナイフでソレをこっそり切り落とそうとした。でも、皮膚をちよつと傷つけただけでびっくりするほど血が出てきて、怖くなって泣き出してしまい、親に見つかってしまった。それはもうこつびどく怒られて。

そして、ボクの先々を案じた両親によつて、ちよつと早い科学のお勉強が始まることになった。生き物は細胞という目に見えない小さなモノの集合体で、その細胞には遺伝子という設計図が必ず入っている。ボクが男なのは、神様がこの設計図を「男として生きていくように」と書き記したからなのだ。

「お前が男として生まれたのはね。神様から、男でなければ出来ないことをやりなさい、と期待されたからなんだよ」

そこまで言われたら、さすがにもう納得するしかなかった。

でも、それでもボクは、心のどこかで諦め切れなかった。じゃあ、その設計図を書き換えればいいんじゃないか。ひよつとしたらその方法がどこかにあるんじゃないか——。

そして、ボクは。

ある日、学校の帰り道で。

魔女に出会った。

「……キミの望みを、叶えてあげましょうか」

信号待ちをしていた交差点で、隣に立つた女性から突然声をかけられた。

すごく綺麗な女性ひとだった。艶やかで長い髪にスカートスーツ。年齢は——何歳くらいなんだろうか。当時のボクは自分より五歳以上年齢が上だとみんな大人に見えていたから、実はすごく若かったのかもしれないし、両親よりも年上だったのかもしれない。

「女の子に、なりたいのでしょうか？」

いきなり言われた。それはもう驚いた。自分のモノを切り落とそうとした事件のことは、両親以外には誰も知らないはずだし。

「私、魔法が使えるんです。だから、キミのこと、何でも知っています」
言いながら、そのお姉さんは指をパチンと鳴らす。

その途端、今まで晴れていた空にいきなり暗雲が立ちこめて、バケツをひっくり返したような大雨が降り始めたんだ。

これは偶然じゃない。絶対に違う。快晴からどしゃ降りまで、体感時間にしてたった十秒もなかつたんだから。

「あらあら、ずぶ濡れになってしまいましたね。可哀想に」

その女性は、さつきまで持っていた傘を、ボクの方に差し向けて。

「この側に、私の家があるんです。雨宿りしていきましょう。服も乾かしてあげます。ずぶ濡れのままで家に帰ったら、お母さんに怒られてしまうから」

知らない大人についていっちゃダメだ。親にも先生にもさんざん言い聞かされていたけれど、この時は親に怒られる恐怖の方が勝った。自分のモノを切り捨てようとして烈火のごとく怒られた後だったし。

——いや、違うかな。

ボクは、この女性が「魔女」だと信じたんだ。魔法の力で、ボクを女の子にしてくれることを期待したんだ。

だから、魔女についていったんだ。相合い傘で、優しく肩を抱かれるようにして。

「可愛いですね……。キミは、本当に可愛い」

「怖がらないで、大丈夫。何も怖くないですよ。私を信じて」

「痛いことなんてしなから。むしろ、気持ちいいだけだから……」
道すがら、そんなことを囁かれた。

雨に濡れて冷えた身体が、魔女の体温をより強く感じさせる。ボクはずっとドキドキしっぱなしだった。心臓が口から飛び出そうで、目が眩むほどに興奮していて。

恐らく、その時が最初だった。女性の肌の感触と温もりに誘われて、欲情し、勃起したのは、単なる生理現象としての勃起とは全く違う。ボクはまだ精通も経験したことがなかったのに、その時は確かに、性的な興奮に胸を高鳴らせていたんだ。

そう、精通。射精。男の身体で得られる快樂。

それはすぐに経験することになる。

「さ、ここですよ」

到着したのは、三階建ての古いマンション。

「上じゃなくて、地下の方です」

ボクがマンションの上の階ばかり見ていたからだろう。そう言った魔女の後についていくと、一階にある階段の裏側に地下へと伸びている階段があった。それを黙って降りていく。扉を開いて、中に入っていく。

そこは、地下室には似つかわしくない5LDKの立派な部屋で——いや、それはまだ幼かった頃のボクの感覚だから、本当はもう少しこぢんまりとしていたのかもしれない。ただ、置いてある家具が年代物の立派なものばかりだったのはよく憶えている。

「濡れた服、乾かしましょうね」

魔女が言う。乾燥機でも使うのだろうと思って、ボクは上着を脱ぎごうとした。けれど、パチン、と魔女が指を鳴らしただけで、ボクの身体と衣服は完全に乾いてしまっていた。「すごいや……。何でも出来るんだね、お姉さん」

感心しながら、この人なら本当にボクを女の子にしてくれるかもしれないと期待した。それこそ、指をパチンと慣らしただけで、あつという間に。

「残念だけれど、そこまで簡単にはいきません。魔法は万能じゃないので」

ソファに座って、魔女が温かい紅茶をふるまいながら説明してくれる。

「お父さんやお母さんにも教えてもらったでしょう？ キミの身体は、男の子として生きていくように設計されているんです。それを変えてしまうのは簡単なことじゃない」

「むずかしいの？ どれくらい？」

「どのくらい……？ そうね、どう言えば伝わるかしら」

魔女が立ち上がった。テーブルを迂回し、ボクの側に歩み寄ってくる。隣に座る。

そして——やおら。

ボクのソコを、股間の大事なところを、掌で包み込んできた。

「え……?! あ、あの、ちよつ……」

戸惑うボクに、魔女はクスツと微笑んで。

「すごい。まだ小さいのに、それでもちゃんと勃^たつてる」

もう、頭から湯気が出るほど恥ずかしかった。でも、ボクは逃げられなかった。

ボクの方に上体を傾けているせいで、魔女の胸元が丸見えだったんだ。

豊満な二つの乳房が艶やかな谷間を作り、魔女が身じろぎをすると淫らに揺れる。その様に目が釘付けだった。お風呂場でお姉ちゃんの胸を見る時もほのかにドキドキしていたけれど、こんなに成熟した——淫らな胸元を間近で見るのは、初めてだった。

「キミの身体はね。今、大急ぎで造られている途中なの」

顔を少し動かせばキスしてしまうような近い距離で、魔女が話す。

「組み立て説明書でいえば、だいたい半分くらいは進んでいるのかな。完成したらどんな感じになるのか、だいたいわかってくる頃です。……でも、男の子も、女の子も、ここまではあまり差がないんです。髪型を変えて着ている服を取り替えてしまえば、本当の性別がどちらなのか簡単にはわからなくなってしまう」

「え……? そう……なの?」

「でも、もうじき、一目でわかるほど全然違ってくるんですよ。コレ[、]のせいで」

魔女がボクの股間を撫でて、言う。

いや、正確には——当時はその言葉を知らなかったけど——陰囊を。

「でも、コレがなくなっても、女の子にはなれないって……」

「簡単に説明すると、キミのコレから、男になるための毒素が出ています。キミがまだこの世に生まれてくる前から、少しずつ、少しずつ、長い長い時間をかけてキミの身体に影響を与えている。……実はね、生き物ってみんな本質的には雌^{メス}なんです。たとえば、キミの設計図が書き換わらなかったとしても、キミがお母さんのお腹の中にいるうちに毒素が出ないようにしてしまえば、キミは女の子そっくりに生まれて、女の子そっくりに育つていくんです。だから、キミの身体にこびりついている毒素を全部取り除いて、新しい毒素を作り出せないよう干からびさせてしまえばいい。わかりますか?」

「……なんとなく」

「キミがもう少し大きくなったら、コレから毒素が大量に放出される時期がやってきます。その時を迎えてからだと、手間も時間もたくさんかかってしまうけれど、今ならまだ簡単です。そうですね、およそ一日くらいでしょうか」

「たった一日? カンタンじゃない。それで女の子になれるの?」

「ええ、女の子そっくりに。元は男の子だなんて誰にもわからないくらい」

その魔女の答えに、ボクはつい眉を顰める。

「そっくり……? そっくりって、どういうこと?」

「毒素の影響を無くしただけだと、そこが限界なんです。キミの身体^の設計図もそのままですから。女の子そっくりにはなれるけど、女の子そのものにはなれません」

「ええー。二セモノじゃだよ。ボクは女の子になりたいんだ」

「……そう」

優しいな、微笑み。

なのに、何故か、ボクの背筋はゾツとした。

「そのキミの気持ち、忘れないで。何があっても、どんなことがあっても、女の子になりたいと強く願ひ続けて。そうしたら、私とその願ひを私が必ず叶えてあげます」

「本当に？」

「本当です。約束します」

不意に、魔女の視線がボクの方からフツと離れた。

ボクもそれを追って、自分の視線を移動させる。魔女の手元の方を見る。

そこには、どこからともなく取り出した小瓶が握られていた。

「何？ それ」

「キミを女の子にするための、おくすり」

瓶の蓋を片手で器用に空けた魔女が、小瓶をボクの目の前へと持つてくる。

これを飲め、ということなんだろうか。

そう思っていたら、魔女は自分で小瓶の中身を口に含んだ。

あれっ、と戸惑うボクに、魔女はにっこりと微笑んで。

黙って、顔を近づけてきた。

「え、あっ……」

思わず身体を引こうとしたんだけど、その前に抱きしめられて。

ボクは、魔女とキスをしてしまった。

初めて味わう女性の唇。それはとても柔らかく、心地良い。

そのうちに、重なり合わせた唇を超えて魔女の舌が口腔へ入り込んできた。キスのあまりの心地良さに、頭の芯がぼうっと痺れてしまっていたボクは、何の抵抗もなく魔女の舌を受け入れてしまう。そして、彼女が口に含んでいたおくすり、唾液と一緒にボクの口の中へととろとろと流れ込んでくる。

口移しされるなんて初めてだったから、ボクはほとんど反射的に舌を動かして喉を塞ぎ、おくすりを呑み下さないよう蓋をしてしまったんだけど。

(……あ、ま、い)

口の中いっぱい、何とも形容しがたい甘い香りが広がっていく。

鼻腔に、胸の奥に、ねっとり絡みついてくるようだった。

意識が甘く蕩かされる、魔性の香り。

お酒なんて一度も飲んだことはなかったけれど、ボクは間違いないその香りに酔っていた。ボクの理性がだんだん失われていく。それがわかる。魔女を抱き寄せ、その豊かな胸元へ自分の身体を押しつけ、肌の温もりを一杯感じなくなってくる。

でも、そんなことしていいのか、とボクは躊躇って――。

(構いませんよ。素直になって、思うままに振る舞って)

突然、魔女の声が聞こえた。

ずっとキスをしたままで、口は塞がっているのに。たしかに聞こえた。

(自分からは勇気が出ませんか？ じゃあ、私から)

脳裏に響くその声の通り、魔女がボクを抱き寄せてきた。大きな乳房がボクの胸元に当たって、歪にひしゃげる感触がある。唇とはまた違った温かさと心地良さ。

その拍子に、ボクは、口の中に留めていたおく、すりと魔女の唾液を飲み下してしまった。最初は、他人の唾を呑むことに抵抗があった。彼女の抱擁を振りほどいて吐き出そうかとも思った。

でも——ボクは、飲んだ。

こく、こく、こく。喉を鳴らして、おく、すりと魔女の唾液を飲み続けた。

あとはもう、歯止めがきかなかった。魔女の首に手を回して、唇にむしゃぶりついて、まだ未成熟な男の本能を剥き出しにして、貪るようなキスをした。そのうちに心の奥底で、女の身体が滴らせる雫はご馳走なんだと気付いてしまう。欲しい。キスが欲しい。もつと。ボクは魔女の唇を舐め回し、短い舌を伸ばして彼女の喉に触れようとし、口腔にある唾液をすべて呑み下そうとした。

でも、あまりにがむしゃらだったものだから。

「っ、あ、ぶは、っ……。はあ、はあ、はあっ……」

息が続かなくなつて、ボクは一旦、魔女から離れる。

「……ふふ、ご馳走様。すごく情熱的なキスでしたよ。初めてとは思えない」

ぺろりと唇を舐め、魔女が言う。そして、荒い息を継ぐボクの頭を撫でてくれる。

「でも、そのお陰で、おく、すりの回りは早くなつたみたい」

「？ それ、どういう……」

——どくん。

「……う、あっ?!」

急に、ボクの身体に衝撃が走った。

自分の意思と関係なく、腰回りや下腹の筋肉が強烈に収縮している。

「な、っ……。なに、これ……」

筋肉の収縮は一度だけではなかつた。どくん、どくん、どくん、どくん。そこに第二の心臓が出来たのかと思うほど、何度も何度も収縮を繰り返す。そして、自分の身体の中に巡っていた何か、吸い取られていくような錯覚に陥る。

その何かとは、強いて言うなら、元氣。あるいは魂。ボクがボクであるために必要なモノ。絶対に手放してはいけないモノ。——少なくとも、その時のボクはそう感じた。

そして、下腹に生まれた第二の心臓は、身体中から吸い取った何かを、すぐ近くにある男の象徴へ向けて、凄まじい勢いで送り込んでいく。

「……始まった」

魔女が微笑み、舌なめずり。

そして、ボクが穿いていた半ズボンに手をかける。

「あ、や……やめ、て……やめ……」

ボクは魔女の手を払い除けようとしたのだけれど、身体中の何か、が下腹に集まっているせいで力が入らない。その間に魔女はボクの半ズボンのボタンを外し、ジッパーを降ろす。その下にあった白いブリーフをずらして——。

「え……」

自分の目を、疑った。

そこにあるモノが勃起しているのは、とっくにわかっていた。けれど、こんなに大きくなっていてなんて。熱く硬くなったそれは包皮を押し退けて桃色の亀頭を露出させ、臍に向かつて反り返ってひくひくと脈打っていた。

こんなの、違う。ボクのモノじゃない。

「いいえ、あと数年も経てば、自然とこうなります」

怯えるボクを慰めるように、魔女が頭を撫でてくる。

「毎日毎日、キミを男にするための毒を分泌し続けて、余って、溜め込んで、どこかに吐き出さずにはいられなくなんです。今はキミの身体中にあつた毒が集まってきて、一時的に大人になったのと同じ状態になっているんですよ。早く吐き出さなきゃ、出さなきゃ、出したい、出したい、つて。それで無理して、膨れ上がって……まだ大きくなる」

「お、おか……しい、よ、これ……なお、して、やだよ……」

このままでは、自分のものが破裂するのではないか。そんな想像が脳裏をよぎり、不安を感じ始めたその時だった。

クスツと笑った魔女が、つん、と、指先でボクのを突いた。

「……っ?! うあ、っ……?!」

びゅくん。びゅくん、びゅ、びゅびゅっ。

あまりにも急で、そして激しかった。ボクの下腹に生まれた第二の心臓が鼓動するたび、ぬるっとした生暖かい透明な液体が下着の中へ大量に放出されていく。

「な、なに、これ……なに……?! お、おしっこじゃ……!」

「先走りの汁。毒を吐き出す前に出てくる準備みたいなものです。普通はこんなに多くないんですけどね。先の方から少し滲んで垂れるくらい」

「や、やだ、やだよ、こわい、こわいよ……!! 何とかしてよお!」

「大丈夫、怖くないですよ。さっきの話、思い出して。毒を全部吐き出してしまえばいいの。さあ、我慢しないで、いっぱい、いっぱい、出しましょうね……?」

大量の先走りがダラダラと流れ出ている先端の穴に、魔女が指先を添える。

そして、ゆるゆる、ゆるゆると、穴の周囲で繰り返し円を描き始めた。

「うあ……ああっ! ひ、う……うあああっ!!」

その感覚を、ボクは過去、一度も知らなかった。

気持ちいい。頭が馬鹿になりそうなほど、気持ちいい。

でも、初めてのことだったから。混乱したボクは痛みと勘違いをした。

「やだ、やだ、やだよだよ……!! やめて、やめてよお……!!」

「そう……? 本当に止めてもいい?」

魔女の指先が、ボクの先端からフツと離れる。

彼女の指先との間に、粘液の橋がかかって、すぐ切れる。

その瞬間、このまま世界が終わってしまうんじゃないかというほどの絶望感と、触って欲しい、ずとずとと触り続けて欲しいという強烈な渴望が胸の中に湧いてくる。

「や……やだよだよだよ……!! やめちゃだよだよ!」

「そうね、そうなりますよね。……素直な子は大好き」

そしてまた。

魔女がボクのモノの先端を撫で回し始める。

それはもう、射精なんて生易しいものではなかった。
むしろ、嘔吐に近い。

出せば気持ちよくなるけど、すぐにこみ上げてくる。耐えきれないから吐き出す。気持ちよくなる。でもまたこみ上げてくる。ひたすらその繰り返し。

数十秒、いや、数分くらい経っただろうか。それでもまだ終わらない。吐き出された白濁の量はどれほどのものだったのだろう。わずかに数滴でもムワツとする牡の臭気を放つ粘液が、ボクの下半身をべつとりと濡らしてしまっただけで大量にぶちまけられていた。

普通なら、思わず鼻をつまみたくなるところなのに。

魔女は、その臭気を、笑顔で、嬉しそうに、胸いっぱい吸い込んで。

「……いい香り」

確かに、そう言った。

「も……もう、もうやだ……やだよ、やだよ……」

ようやく少しだけ、精の放出が治まってきた。身体中に脱力感がのしかかってくる。あまりの快楽にボクは混乱するばかりで、耐えきれずに泣き出してしまった。

「あら、どうして泣くんですか？ 気持ちよかったですでしょう？ それとも、嬉し泣き？」
言葉の意味がわからず、ボクは呆然と魔女の顔を見つめる。

「自分の胸元、見てごらんさい」

魔女がボクの上着をまくり上げていく。ボクは自分の胸元に目を落とす。
信じられなかった。

小さいけれど、わずかだけれど。ボクの胸は確かに膨らんでいた。

それはまだ、体操着の着替えが男女別になる前。クラスみんなと着替えをする時、一瞬だけ見たことがある。同級生の女の子の胸元。それとちょうど同じくらいの一。

「キミの身体、女の子に近付いてますよ。確実に」

「ほ、ホント……だ、ホントに、ボク……女の子、に……」

「でも、まだまだ、もつとよ。もつと出しちゃいましょうね……？」

言いつつ、魔女がボクの股間へ大胆に手を差し入れてきた。今度は指先で撫で回すのではなく、竿状になった部分を包み込むように挿んで、上下にしごぎ始めたんだ。

「——うあつ?! あ、うあ、あああつ!!」

また、射精が始まる。強烈な快楽に頭が焼け付き始める。

「ほら、まだまだ……まだ出るわ、まだ……もつと出して、もつと、もつと……。ほら、ほらほら、ほらつ……まだ、まだ、もつと……!!」

「うああああ?! ひあああつ!! やあああつ! うわあああつ! あああつ、あつ、あつ……うあああつ!! ああああ——つ!! うわあああああつ!!」

気持ちいいけれど、すごく気持ちよかったけれど。

拷問も同然だった。

このまま殺されるんじゃないかって、心底怖かった。怯えていた。

そのうちに、魔女の手の中で、ボクのモノが小さくなり始める。竿状の部分の根本にぶら下がった陰囊も縮み始める。

本当に男じゃなくなってしまう、男の象徴を奪われる——!!
そういう本能的な恐怖が、初めて湧き起こる。
もう、理屈じゃなかった。
ボクは全身の力を振り絞って魔女の手を振り払い、部屋の外へ向かって、全力で、逃げ出した。

○

「……作り話にしては、よく出来てると思うけど」

ボクの——いや、俺の話を聞き終えた彼女の最初の感想はそれだった。途中から真剣に聞き入ったから、てっきり信じてるのかと思っただが。

「ま、信じられないのも無理はないな。俺も正直、夢だったような気がしてる」

「そうよね……。途中で女の子になりかけるほど身体が変化してたのに、ただ逃げ出しただけで治ったりする訳ないものね」

「あ、いや、そこは話してないだけだ。すぐには治らなかったよ」

笑い飛ばそうとした彼女の顔が固まったけれど、構わず話を続ける。

「家に逃げ帰って、玄関にカギかけて……。ちようど親がいなくてさ。汚れた服は捨てて、風呂に入って、着替えて、ベッドにくるまった。変になってた自分の身体は誰にも見せなかった。とにかく怖くて。気分が悪くなってウソついて飯も食わず、次の日も学校を休んで……。いや、下半身はずっと勃たつたままで、いまにも爆発しそうで、そういう意味では体調悪かったんだけど……。とにかく、その状態で三日くらい過ごしたのかな」

「……それで？」

「四日目の朝に治った。勃たつたのも治まって、胸もべったんこ。アレの大きさも、事件が起きる前と同じくらいに戻ってたよ」

「男になるための毒を、あなたの身体が一生懸命分泌して、元に戻した？」

「魔女の言葉を借りれば、そうなるのかな」

彼女の顔は真剣そのもの。自分で話しておいて何だが、こんな突飛な話をそんなに信じ込まれるとは。俺の方が居心地が悪くなってくる。

「夢だつて、夢。小さい頃の頃の記憶なんてアテになんないもんだろ？ ほら、インフルエンザとかに罹かって幻覚を見たとか、そういうヤツじゃないかな」

「本当にそうかしら」

今まで寝そべっていた彼女が、むくつと身体を起こす。

「その魔女の言ったことって、部分的には正しいのよ。S R Y 遺伝子の作用で胎児の生殖腺から精巣が発生、そこから男性ホルモンの分泌が始まって第一次性徴を引き起こす……。プロセス自体は間違いないし、その過程で何らかの異常があつて男性ホルモンの影響を受けられないと、X Y 染色体を持っていても卵巣と子宮を持った女性として生まれてくる。ここまでは本当のことだもの」

「……ああ、そういうえばお前、大学では生物学が専攻だったとか言ってたっけ」

「ただ、身体中の男性ホルモンを精液と一緒に吐き出すっていうのはどう考えても無理だし、仮にそれが出来たからって、後天的に体型が女性化していくワケないんだけど……。ねえ、それ、本当に夢だったの？ 後で確かめた？ 魔法の住処に行かなかったの？」

「行かない、行かない。怖かったってのもあるが、それからすぐに家族が引越してさ。校区も変わったし、前の家の周辺に行く用事もなかったから」

「じゃあ、それっきり、なんだ」

「そうなるな。そもそも、この話を他人にしたのも、お前が最初だ」

しばし、沈黙。

何となく、気まずいような空気が流れて。

「まあ、でも、今にして思えば、もったいないことしたけどな」

つい、軽口を叩く。

「魔法の事件がホントにあったかどうかはともかく、あれが俺にとって最初の射精ってのは確かなんだ。頭が焼け付くほど気持ちよかったのも、俺の中では事実だよ。……本当に、気持ちよかった。そりゃあもう。フツーにピュッてる量の何倍だって話だもん。ぶっちゃけ、あれ以上の気持ちよさはまだ一度も味わったことがないんだよ、俺」

そう、口走ってから。

しまった、と思っただが、遅かった。

「……何ですって？」

彼女がシートを放り出し、糸纏わぬ姿で俺の方に這い寄ってくる。

「私とセックスするより、魔法に手コキされた方が気持ち良かったって言うの？」

「あ、い、いや、そういうつもりで言った訳じゃ」

「ウソつけこらっ。だいたいあなた、魔法の話してた時、ココのところピンピンしてたじゃない！ その時の気持ち良さを思い出して興奮してたんでしょ！」

「え、つと、まあその、凶星なんだが……。見たのかよ、お前」

「ああもう、くやしいっ！ 許さないっ！ こうなったら一晩中かけてでも、あなた史上最高気持ちよかった記憶ランキングを私とのセックスで上書きしてやるんだからっ！」

「お、おい、ちよつと待て、お、落ち着け、お互い、明日も仕事……」

「問答無用っ!!」

そうして俺は、新たな魔法と化した彼女に押し倒されて。

本当に朝まで、何度も何度も、勃たなくなるまで搾り取られるハメになった。

——でも。

何をどうやったって、男のアクメは——射精は、たった数秒で終わる。

もちろん、それだけでも充分に気持ちいいし、定期的にしなくちゃ我慢できないくらいクセになる。全ての男はそのたった数秒のために生きてると言っても過言じゃない。

それがあの時は、二回、三回、十回、二十回。切れ目なしに延々と続いた。

とても、比べものにならない。

気が狂いそうなくらい気持ちよくて、怖くなって、耐えられなくて、泣いてしまう。そんな経験は、普通のセックスじゃ味わえやしない。

あ、いや、女になって、それなりに性の経験を積んで、感覚を開発して、相性のいい男と出会うことができれば、それが普通になってしまふのかもしれないけれど。
男に生まれた俺には、無理な相談だ。
後天的に女になるなんて、できるはずがないのだから。

だから、朝。

彼女と別れて岐路に就く、その途中で。

「……あの時、そのまま女になってたら、どうなったんだろうな」

苦笑しながら、俺はそんなことを呟いたりもした。

女になって、エンドレスで襲ってくるアクメに身を震わせる自分を妄想してみても。

「はは……。あんだだけ搾り取られたクセに、元気だねえ……」

大事なところをみるみる硬くなっていく。自分の身体の節操のなさに、ちよつと呆れた。

そして、何気なく。

自宅マンションの郵便受けを、開いた。

「……なんだ、これ」

郵便受けに、封筒が入っていた。

底の方が大きく膨らんでいたもので、訝しみながら取り出す。

「液体……の、入った、小瓶……？」

背筋が凍った。

まさか、と思い、封筒の中を再度確かめる。

一通の短い手紙が添えられていた。

Make your wish come true.

The contract is still effective....

筆記体の英文。

手紙に書かれていたのは、それだけだった。

その意味を訳せば——こうなる。

あなたの望みを実現させて下さい。

約束はまだ、有効です……。

体験版の内容は以上で終了です。
続きは作品本編でお楽しみ下さい。